

平成二十六年
度
清風中学校入学試験問題

前期

国語(六〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項を読んでください。

【注意事項】

- 一、試験開始の合図で、解答用紙の所定の欄に「受験番号」、「氏名」をはっきりと記入してください。
- 二、この「問題」冊子は、14ページあります。解答用紙は一枚です。ページが脱落している場合は手をあげて試験監督の先生に知らせてください。
- 三、解答は、解答用紙の指定されたところに記入してください。
- 四、「問い」に「字数制限」がある場合、句読点やカギかっこなどの記号は、一字として数えて、解答してください。
- 五、試験終了の合図で、「問題」冊子の上に解答用紙を重ねてください。
- 六、「問題」冊子及び解答用紙は持ち帰ってはいけません。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、設問の都合上、一部本文を変えたところがあります。)

教室の中で幸雄の鉛筆研ぎ(鉛筆削り)がなくなり、その犯人として家が貧しいことを理由に千代子が疑われた。俊博たちが、千代子の鞆を開けようと迫った時、篤義が思わず割って入った場面である。

「待て！……待てくれ」

篤義は、次の言葉を搜した。周囲の目が自分に集まったことを、全身に感じた。

①「オラがとった。じゃけん(だから)、……もうやめてくれ」

篤義は、思いついた言葉をとぎれとぎれに、やっと口に出した。

「おーい。アツが白状したぞ」

俊博が得意満面に、周囲にアピールした。自分の手柄であるとばかりに。

教室の中にざわめきが起こり、そのざわめきは、いつまでも止まぬかのように、篤義の上を波打ちながら通り抜け、また、戻って来るかのように彼を去らなかつた。そのとき、篤義の中に、とぐろを巻いた大蛇の身体が、自分を取り巻きながら動き始めた印象が現れた。彼は、自分を支配しようとするその「力」を、自分の中で、叩き潰すように打ち壊した。勇気が、そうさせたのではない。「もう、それどころではなかつた」のだ。

そのざわめきの中で彼は、次の手だてを考えていた。『父ちゃんに、買ってきて貰おう。あした戻すことにしよう……』そう思ったが、篤義の考えはすぐ壁に突きあつた。彼は、その鉛筆研ぎを一度も見えていなかったのだ。それがどういう物か聞くわけにもいかなかった。

「はよ戻せ、アツ」

幸雄が、被害者然として(被害者のような様子で)、篤義の前に立った。事件解決の立て役者、俊博もつき添っている。

「あした戻すけん(戻すから)」

「今、戻せ！」

「……」

「泥棒にゃ貸しちゃれんがじゃと(貸してられないんだと)」

俊博が、横から口を出した。

③「捨てたけん。おんなじが(同じのを)、あした買って戻すけん」

篤義は追い詰められたように感じた。口が裂けても、それがどんな鉛筆研ぎか、聞くわけにはいかなかった。

「おんなじがぞ」

幸雄が、あらためて釘をさした。

「……」

「泥棒に、しおめし(塩をかけただけのお弁当)か。ええコンビじゃ」

俊博が、周囲にアピールするように大声で言い放った。

「アツ君は、とっちゃらん(盗ってない)。アツ君じゃない！」

俊博のアピールに応えるように、耳元で、千代子の声が大きく響いた。

一瞬、シンッと静まりかえった。

「アツ君は、みんなと一緒に出ていってから、いっぺんももんちゃらん(一度も戻ってない)。アツ君はとっちゃらん」
うしろのほうから、逸子の声が聞こえてきた。

「ウチもとっちゃらん。全部見せちゃん(見せてあげる)！」

千代子は、言うが早いか、自分の鞆の中身を全部机の上にぶちまけた。

「ウチも」

逸子も、同じように自分の持ち物を机の上に曝した。

「アツは、白状したがぞ」

俊博は、余裕を失ったかのような口調で反撃した。

「けんど（けれど）、アツは藤の木に登りよったがぞ」
だれかの声が、俊博に反撃した。

「木の上に隠したがじゃ！」

だれかが、真相を見つけたかのように、得意げに大声を上げた。

「けんど……アツ君、ウチらが遊び決めよったとき出ていったがぜ（出ていったのよ）。いつとったが？」

由美子の小さな声が、周囲を圧倒した。

「アツ君……」

千代子の目が、真剣な表情で篤義の目を捉えた。

「ウチ、ほんとにとっちゃらんがぜ」

千代子の目に、涙が溜まった。一文字に結んだ唇が震えている。

「……」篤義は、千代子の怒りが自分にも……いや、自分自身に向いているように感じた。そのわけは、すぐに思い当たった。

「オラもとっちゃらん！」

篤義は、大声で千代子の目に応えた。それと同時に、千代子の気持ちを傷つけてしまった自分をぶちこわしてしまいたいような嫌悪が、彼の中を駆けぬけた。彼の思いは、俊博らへの怒りとなって高まり、自己嫌悪は、自分を守ることを彼に放棄させた。

「俊博！」

篤義の表情が、あおぎめた。体が震えているのがはた目にも分かった。

「なせ（なぜ）千代子が犯人か言うてみい」

彼は、喋りながら俊博に歩み寄った。全身に怒気が溢れていた。

「なせ千代子がやったが（やったのか）言うてみい！」

「おまえ。しおめしの味方か」

そう言いながら、俊博の顔が引きつるように歪んでいるのを、篤義は、はっきりと見ていた。もう目を外すことはなかった。

「そんなこと聞きよらん（聞いていない）！ はよ言うてみい！」

「……」——Ⅰ

「それにおまえは、千代子をしおめし言うた。しおめしの何がわりいか（悪いのか）も言うてみい！」

「……」——Ⅱ

実際のところ篤義は、自分がこんなにスムーズに喋ることができるとは思ってもみなかった。長いあいだ、自分の中に閉じこめ、そして考え続けた言葉が、今大蛇の顔めがけて叩きつけるように言い放たれている。彼は、自分の中に一種の陶酔^⑤さえ感じていた。

「言えんがじゃろう（言えないだろう）。言えざったら（言えないのだったら）、はじめから何ちゃ言うな（何も言うな）」

俊博の表情に、怒気が表れた。しかし彼の顔は、屈辱のために引きつるように歪んでいた。

「やあるかー！」

俊博は、席を立てて篤義に向かいあった。いつもなら、これで自分の勝ちと正義が決定する。彼は、喧嘩にかけては、絶対と言えるほどの自信と実績を誇っていた。篤義とやりあったことはないが、篤義など自分からすれば、喧嘩の対象ですらないのだ。彼の表情は、『これで、勝ちである』ことを宣言していた。

⑧「それしか言えんが（言えないのか）、おまえは」

篤義の驚くほど落ち着いた声が、静まりかえった教室に低く響き渡った。

「なにー！」

俊博は、そう言うなり篤義の胸ぐらを掴んで殴りつけた。

（ 笹山久三『四万十川』 ）

⑨ アピール—— 広く他人に向かって自分の考えなどを訴えかけること。
立て役者—— 芝居で中心となる重要な役者。

嫌悪——にくしみきらうこと。感情的にひどくきらうこと。

放棄——きっぱりとやめること。

怒気——怒った気持ち。怒りを含んだようす。

スムーズ——物事や動作などが抵抗なく円滑に進行するさま。

陶醉——心を奪われてうっとりすること。

問一——線部①で『オラがとった。じゃけん（だから）、……もうやめてくれ』とありますが、なぜ篤義はこう言ったのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 本当は盗っていないけれども、嘘をついてでも自分が罪をかぶることで、千代子が責められるのをかばうため。

イ クラスで目立たない自分が、鉛筆研ぎを盗った犯人として注目されるチャンスだと思ったため。

ウ 千代子に好意を寄せているので、千代子を助けることで格好のよいところを見せたいと思ったため。

エ 本当は鉛筆研ぎを盗んだのが自分なので、千代子が疑われてかわいそうに思ったため。

問二——線部②「壁に突きあたった」④「釘をさした」⑦「はた目にも分かった」について、ここでの言葉の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

②「壁に突きあたった」

ア 否定された。 イ 行き詰まった。 ウ 取り返しをつかいないことになった。 エ 見通しが立った。

④「釘をさした」

ア 念押しをした。 イ 嫌味を言った。 ウ 無理難題を押しつけた。 エ 仲を取りもった。

⑦「はた目にも分かった」

ア よく観察できた。 イ 震動が感じられた。 ウ 折り目が正しかった。 エ 他から見ても分かった。

問三——線部③「篤義は追い詰められたように感じた」とありますが、なぜ篤義はこのように感じたのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア クラスのみんなが自分を加害者として冷たい目をして見ていると感じられたから。

イ 俊博が得意満面に周囲に手柄をアピールして意地悪そうにこちらを見ていたから。

ウ 一度も見えていない鉛筆研ぎの特徴を聞き出すのがむしように恥ずかしかったから。

エ 自分が言い出した話の筋書き通りに事を運ぶことが実現不可能だと思われたから。

問四——線部⑤「千代子の怒り」とありますが、どのようなことに対しての千代子の怒りであると篤義は感じていますか。「篤義」「千代子」「鉛筆研ぎ」の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問五——線部⑥「自分を守ることを彼に放棄させた」とありますが、ここではどういうことですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 俊博たちへの怒りがあまりに強くて、篤義は自分がついた嘘の真の理由を千代子やみんなに説明することも忘れてしまったこと。

イ 篤義は、千代子の貧しさをからかう俊博に直接ぶつかることは普段ははばかれるが、この時はそのためらいが吹き飛んでしまったこと。

ウ 篤義自身に対する千代子の怒りを感じたが、自分の嘘の理由を説明して千代子の誤解をときたいという気持ちは後回しになってしまったこと。

エ 千代子を見下すような発言をする俊博に腹立たしさを初めて感じ、ケンカになって殴られてもかまわないとやけくそになったこと。

問六 篤義にとって乗り越えなければならぬ恐怖の象徴として描かれているものを、本文中から九字でぬき出して答えなさい。

問七 本文中の『……』Ⅰ・Ⅱのように篤義からの二つの質問に俊博は答えられませんでした。俊博が答えられない理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千代子がおめしだからという理由だけで泥棒と決めつけたことを、いつもは弱い立場の篤義に責められて、反論できず、気持ちになえたから。

イ 千代子がおめしだからという理由だけで泥棒と決めつけたことを、いつもは弱い立場の篤義に責められて、反論できず、屈辱的な気持ちと怒りがこみあげ、また後ろめたい気持ちも出てきたから。

ウ 千代子がおめしだからという理由だけで泥棒と決めつけたことを、いつもは弱い立場の篤義に責められて、反論できず、泣きそうになったから。

エ 千代子がおめしだからという理由だけで泥棒と決めつけたことを、いつもは弱い立場の篤義に責められて、反論できず、千代子が犯人であることを主張するのをあきらめたから。

問八 線部⑧「篤義の驚くほど落ち着いた声が、静まりかえった教室に低く響き渡った」とありますが、教室のみんなはどのような状態であつたと考えられますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア いつものように俊博の勝ちと正義が決定して、篤義はこれ以上しゃべることも出来ず、教室のみんなもどうしようもない状態。

イ 篤義のいつにないがんばりに対して教室のみんなは心の中で応援したが、結局喧嘩によって俊博の勝ちと正義が決定した状態。

ウ いつもなら俊博の勝ちと正義が決定するはずだったが、今回は篤義の落ち着いた態度に、教室のみんなも圧倒されている状態。

エ 俊博の顔は屈辱のために引きつるように歪んで、教室にいるみんなのことなど考えている余裕もなく、篤義を殴りつけた状態。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（ただし、設問の都合上、一部本文を変えたところがあります。）

世に「間の悪い人」というのがある。

いたずらをしょっちゅうやっている奴が先生には見つからず、たまたま一度だけやったときに見つかって叱られるような奴だ。あるいは、「今日は久しぶりに豪勢にすぎ焼きだ」と家族中で盛り上がっているときに、ブラリと立ちヨってしまふ人も間が悪い。まあこれは寛容な家族なら「間がいい」ということにもなるかもしれないが、娘と彼氏のラブシーンを見てしまった父親などは完全に間が悪い。

ところで、「話の間の悪い人」というのもいる。

① 対話のタイミングが妙にずれたり、「そこでそれを言っちゃあおしまいだよ」ということをつい口を滑らせてしまうようなのがそれだ。

とりあえず聞いてみただけなのに、妙に深く考え込まれるのも間が悪い。場が気まずくならないように何気なく「趣味とかある？」と聞いたのに、考え込まれたあげく「ない」と言われると、とりつく X がない。

そういうえば、「間を持たせる」会話というのもひとつの技だ。世間話ができるというだけでも、コミュニケーション力としてはあるレベルに達している。

あるテレビ局関係者によると、最近の若いスタッフが出演者と世間話ができないので間が持たず、結局年輩のスタッフが気を遣って代わりに話をするということがよくあるらしい。問題は、世間話の上手い下手というよりは、「間が持たない」という感覚や「気まずい」という感覚をそもそも持ち合わせているかどうかということだ。

これはマンションのエレベーターの中などで二人きりになってしまったときに訪れる感覚だ。まったく気まずさを感じなければ平気でいられる。妙にイゴコチの悪い沈黙を感じながらも会話を切り出せないときに、気まずさを強く感じる。こうしたときに年輩の女性強い。ごく自然に天気の話などを切りだして、うまく間を持たせてくれる。

② 会話のうまさは、車の運転に似ている。

車線変更をするのは、初心者ドライバーには大きな課題だ。前を見ながら横も気にしなければいけない。往々にして初心者が犯

しやすいミスは、スピードを落として隣の車線に入ってしまうことだ。若干加速して入ってくれる方が後ろの車は助かる。この「若干の加速」がカットイン走法のコツだ。

このカットインがうまくできると、車の流れに沿った気分のいいドライビングができる。かく言う私は、近頃はともかく、免許取り立ての頃はこのカットインができず、曲がりたいところを曲がれずにひたすらまっすぐに行ってしまうという目に何度もあった。追い込まれて、乗りたくもない高速道路にまで乗ってしまったこともあった。ふだんはいい加減な性格なわりに、車に乗ると急に「曲がったことが大嫌いな男」になってしまうのであった。

この厳しい経験の中で私が学んだのは、流れに乗るためには加速が大事ということだ。

高速道路に入るときなどは、加速しないと本当に危ない。会話でも、三人ほど話が盛り上がっているときに、突然新参者が会話の流れを思いっきりぶったぎるような初歩的な質問をしてくると、高速道路でブレーキを踏むような不快感が生まれる。

「もうちょっと話の流れをしばらく聞いていて、それから加速して入って来いよ」と言いたくなってしまう。

子どもはやたらと大人の話に割り込んで来たがるが、話の「Y」を折る発言をなおさせるのには苦勞する。カットイン会話術は、ひとつの技なのだ。

お盆休みに田舎へ行き、隣家の人と妙な形に仕上がってしまったキュウリの失敗作について話をしていたら、横にいたミルというでっかい犬がそのキュウリを食べ始めた。飼主によると、キュウリなどは好きではないはずなのに、会話に加わりたいためにがんばって食べているとのことであった。③犬ながらあっぱれなカットイン走法であった。

さて、間が悪い若者が増えていると世間に言われては大学教師の名が廢ると思ひ、間の感覚を磨く練習を早速学生とやってみた。

二十人ほどで円になってシェイクスピアのセリフなどを回し読みするのだが、丸で区切るのではなく、点で区切ることにした。長い文章になると、四、五人でひとつの文章を言うことになる。

これはやってみると実に傑作だった。まるで一人の人間のセリフに聞こえない場合もあれば、まるで一人の俳優がしゃべっているようになだらかなリズムができる場合もあった。この上手い下手は偶然ではなく、完全に技術の差であった。うまかったのは女

の子三、四人が続くところで、そこに行くといつもなだらかに行くのに、一方で必ずぶつ切りになる陥没地帯もあった。

ミスの多くは、相手のセリフが終わってから息を吸ってしまい、間が空きすぎてしまうということだ。相手の息に自分の息をのせていくという感覚があるとうまくいく。そのためには少し先取りをして息を吸っておかなくてはならない。

間が空きすぎてぎくしゃくするミスが連続するのを見ていて、「これは何かに似てるなあ」と感じた。よくよく思い返してみてもうよく思い出した。昔やった大縄跳びに似ているのだ。

たしかにそれは出だしのタイミングで迷う。完全に縄が通り過ぎてあいたと思う瞬間にスタートを切ると、縄に捕まってしまう。間を少し先取りして入っていくのがコツだ。

タイミングを見つけれずにうずうずしてスタートを切れない子どもも見ていると可愛い。カットインする間の感覚を磨いているのだなあとと思うと微笑ましくなる。

この大縄跳び遊びは、縄がなくてもできる。二人が縄を持ったような格好で、大縄跳びのイメージで腕を回す。④周りは縄をイメージしてタイミングよく入っていく。セイコウしたか失敗したかは外から見てもわかる。これはたしか演出家の竹内敏晴さんのレッスンにもあったと思うが、私はこれを高齢者中心のゼミでやって盛り上がった。

前の人が跳ぶときには、もう自分が跳ぶつもりで息を整えておいて、流れるようにしていく。この流れをつくる「間の感覚」こそ、会話術のコツである。

問一 — 線部 a、c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 X と Y に入る最も適切な言葉を次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時 イ 島 ウ 腕 エ 腰 オ 口

問三 — 線部①「それ」は、何を指しますか。本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問四 — 線部②「会話のうまさは、車の運転に似ている」とありますが、どのような点で似ていますか。解答欄にあわせて本文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

会話のうまさは、車の運転と、二十字以内 点で似ている。

問五 — 線部③「犬ながらあっぱれなカットイン走法」とありますが、具体的に説明しているところを本文中から四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字で答えなさい。

問六 本文で述べられている「間の悪い人」に属するものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 最近の若いスタッフ。

イ 年配の女性。

ウ 初心者ドライバー。

エ ミルというでっかい犬。

オ 女の子三、四人。

問七 — 線部④「演出家の竹内敏晴さんのレッスン」とありますが、そのレッスンの目的は何であると考えられますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 素晴らしい演技をするのに必要な体力を養うため。

イ 芝居の中の大縄跳びのシーンに迫力を与えるため。

ウ 演技に欠かせない間をはかる感覚をきたえるため。

エ 運転に必要なカットイン走法を俳優に教えるため。

【三】の問題は、次のページにあります。

【三】 次の文章を読んで、下の①～⑩の意味にあてはまる語句を指定した字数にしたがって本文中からぬき出して答えなさい。
(意味は、『広辞苑』あるいは『明鏡』に記されているものです。)

世界文化遺産に登録された富士山は日本人にとって精神的な支えだ。そのことをユネスコの世界遺産委員会のメンバーもきちんと認めてくれた。うれしいことだが、富士山が日本人の生活のため果たしてきたもうひとつの役割も忘れたくない。▼気象観測の拠点としての役割だ。今でこそ人工衛星にその座を譲ったが、昭和40年に運用を始めた山頂のレーダーは、太平洋から刻々と列島をうかがう台風の姿をとらえ続けた。高度4千メートル近い地点で観測される気温や風速は天気を予報するうえで、貴重なデータとなった。▼明治期、この富士山頂での観測に先鞭をつけた若き気象学者とその妻がいた。野中至、千代子夫婦である。独学で気象学を学んだ野中は高地での観測の必要を知り、富士山頂で越冬することを思いついた。明治28年秋のことで、費用は自宅を売り払った金をあてた。▼初めは野中1人で登る予定だった。

① (二字)	過去の人が残した業績。
② (二字)	惑星の周囲を公転する天体。地球をまわる月など。
③ (二字)	うまく機能を働かせ用いること。
④ (二字)	次第に時間が過ぎていくさま。
⑤ (三字)	判断・推論の基礎となる客観的な事実。
⑥ (二字)	物事をするために必要な金銭。
⑦ (二字)	行事や行動などをあらかじめ定めること。
⑧ (二字)	毎日の出来事や感想などを一日ごとに書き記した記録。

た。だが千代子も夫を助けたいと、足腰を鍛えて山頂に同行することになった。「御国の為と聞くならば：兎にも角にも登山せばや(登山したい)」。産経新聞社『教科書が教えない歴史』によれば、千代子は日記にこう決意を書いている。▼だが2人とも登山は素人だった。氷点下20度以下の寒さや強風の中とともに倒れ、心配して登ってきた慰問隊にようやく救出される。それでも10月から12月まで82日間も観測を続けた。やがて山頂に国の観測所が造られ、通年観測が行われるきっかけともなったのだという。▼穏やかに見える富士山も、命がけでこの山と取り組んだ人々の歴史を秘めている。そして時には人を寄せつけないようなむき出しの荒々しさも見せる。世界遺産登録で、今後増えるかもしれない無謀登山やお気楽登山への戒めとしたい。

(産経新聞「産経抄」二〇一三年六月二四日)

⑨ (四字)	物事を始める手がかり。また、その動機や機会。
⑩ (四字)	おおいかくさないで、あらわに出すこと。

- ⑨ 拠点 — 活動のよりどころとなるところ。
- 先鞭 — 人より先に着手すること。
- 慰問 — 見舞ってなぐさめること。
- 戒め — 教えさとすこと。

